

わが青春のスーベニール

桧 垣 陽 一*

大学の土木工学科を卒業してただか8年程度しかたっていない者にとって、「土木」との出会いを何らかの運命的調子体裁で想い返すというこは、いささか荷が重い。一つは、私にとって「土木」ないしは「土木技術者」というイメージがある種の社会的使命感に裏打ちされた、確たる形ではまだ固定されていないということと、もう一つには、やはり若さということの弱みであって、人生の中途半端な時点において一つの区切りにも似た「心情の吐露」をすることに対する照れ臭さにもよる。しかし、逡巡の挙句であれ原稿を引受けた以上何かをまとめねばならない。私の場合、学生時代の東南アジア旅行を出発点とする、東南アジアとのかかわりあいの中の「土木屋」としてのささやかな問題意識を書いておこうと思う。

昭和38年の春から秋にかけて、私は東京大学東南アジア踏査隊の一員として東南アジアの、おもにメコン河流域の国々を旅行する機会を得た。その数年前から国連では東西間の対立に代って南北の富の偏り、すなわち南北問題が大きくクローズアップされてきていた。先進国の開発援助の一環として日本政府に提出された日本工営久保田豊氏のメコン河下流域に関するすぐれたレポートによって啓発されたこともあったが、われわれ土木工学科の学生にとって、前進しつつある国々に対する開発援助がどのようであるべきかは非常に興味ある問題であった。一方、エコノミックアニマルという言葉がそろそろはやり出すところで、アジアにおける日本といったテーマが総合雑誌で盛んに取り上げられる時代でもあったが、わが踏査隊は、そういったことを真剣に考えている文科の学生を何人か加えて、10人ほどで東南アジア諸国を歩いてみようというものであった。踏査行の前半はタイ北部の山岳民族に関する専門家、東大文化人類学学科の大林太良講師を、後半では水資源問題の権威、同土木工学科の高橋裕助教授（現在教授）を隊長として、メコン河沿いに歩きながらフィールドワークをしようという特色ある編成だった。旅程はタイを起点としてカンボジア、南ベトナム、ラオスとインドシナ半島を反時計回りに回って再びタイに帰ってくるもので、タイからは何人かの

有志がマレーシア、インドネシアに足をのばした。

タイでは、当時国連エカフエの水資源調査局長であった安芸皎一先生に随分とお世話になった。バンコックでは、われわれはハナヤホテルという木賃宿に滞在していたのであるが、先生はそのうす汚いホテルにわざわざ車を寄せられて、東南アジアの水資源開発援助の実態について熱弁をふるわれた。そのお話の中で忘れられないことがある。メコンデルタでは飢饉による住民の餓死ということが、歴史的にかつて一度もないということであった。「メコンという豊穡のための氾濫を繰り返す河と、モンスーンという稲作にとって最適な自然的条件がその驚くべき事実を可能にしていると思うが、長年の風土的特性に応じた稲の成長、たとえば水かさの増大する速度に応じて稲の茎がぐんぐんと伸びて、何メートルにもなるのですから」といった先生の嘆息が、いまでも耳の底に残っている。

タイ国内で踏査隊の他の連中がヤンヒードダム等を見学して回っているころ、私は大林講師に随伴してタイ北部のチェンマイ、メサリアンをベースに、ビルマとの国境線に沿って点在する山岳少数民族の村落の調査をして歩いた。2週間程度の短期の旅行であったが、バンコックの日本大使館の石井米雄氏（現京都大学東南アジア研究センター教授）から、その地域の治安の状態の悪いことが指摘されていたから非常に緊張したものであった。私の役目は何人かのポーター達を統率することと、カービン銃を肩に大林講師のボディガードをするといったものであったが、ときに磁石と歩幅で村落の平面図を作成したり、日本の製薬会社からのプレゼントである栄養剤等を村の人々に配達したりすることでもあった。この大林先生との調査行で痛感したことは、将来の土木的開発の援助が、その国の全体的開発という大義名分だけを考えて、少数民族の生活の場を犠牲にするようなものであってはならぬということであった。旅の途中で会ったカレン族の若者は、「私はタイ人ではなく、カレン人です」といったが、その誇り高い姿勢が印象的であった。

カンボジアでは、アメリカ道路、ソビエト病院といったふうの米ソ両国の個別的な援助の形態が目立った。ま

* 正会員 建設企画コンサルタント(株)計画部主任技師

た、われわれがバンコックから空路プノンペンに着いたその時期は中共から劉少奇国家主席が公式訪問するとかで、市をあげてその歓迎の準備に追われていた。

われわれは、プノンペンを中心として、内乱状態にある現在ではとても歩くことのできない地域、トンレサップ湖、シアヌークビルの新港建設、バタンパンの農業センター（日本の援助）、サンボールのダム予定地点等を精力的に見て回った。

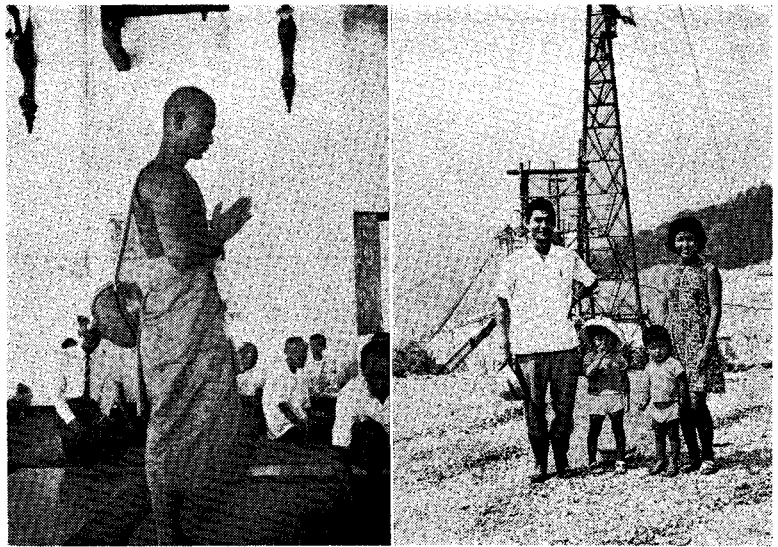
北部の町スタントレンからは、電車の踏切りを越えるように国境の遮断器を上げてもらってラオス領に入り、コーンの滝を見ることができた。また、クラチュエの町からは対岸がモヤッとかすんで見えるほどに広いメコン河の悠々たる水の流れにまかせて、乗合船でプノンペンまで下ったが、いかにも人々の生活の基本的な原理といったものであるその大河を、自然の摂理ではなくて、人工的に開発・制御することが果して是なのかといった素朴な疑念にとらわれた。

南ベトナムはゴア政権末期の政治的困乱の時期であったが、サイゴンから空路ダラットへ飛んで日本の賠償工事であるダム建設現場をみた。土堰堤の上をつっぱしるキャタピラー社の大型のモータースクレーパーが妙に印象的であった。

サイゴン郊外の変電所では女性をふくめた若い土木や電気の技術者達と意見を交換する機会をもったが、彼らは日本の明治維新に対する豊富な知識を示し、やがて訪れるであろう平和の時代の、国家建設に対する情熱を披歴した。

サイゴンからラオスのビエンチャンに飛んで、そこでは日本の援助による水道工事をみた。また、折よく日本工営の久保田豊氏が滞在しておられて、ランサンホテルの朝食にわれわれを招いて下さった。氏の電源開発に関する溜々たる雄弁を彼地で聞けることは、望外の幸せであった。

ビエンチャンから再びタイのバンコックへ帰り着いたが、そのバンコックで、鉄道でマレー半島を下る仲間達と別れて、私は僧侶になるという、きわめて個人的な体験をした。



ワットマハーターにおける得度式（左）と、ラオス・ナムグムプロジェクトの左岸に立つ筆者と家族（右）

タイから始めて、かけ足旅行的にメコン河流域の国々をみて、いずれの日にか「土木屋」としてそれらの国々の建設的な開発援助に、かかわりあいを持つことを隊員の土木の学生達は予感し、願ったことと思う。たとえ土木技術というものを通じなくても、「日本人」としてよい意味でのかかわりあいを持ちつづけたいといった願いを起させるに十分なほど、それらの国々の自然と人々は魅力的であった。そして、それらの国々の人々との共通の体験を、青春の記憶のうへのひとつのスーパーニールとして残しておきたいと私自身も願った。

7月7日のタナバタの日の翌日、バンコックの王宮ワットプラケーオに近い吉利、ワットマハーターで、高橋裕隊長や土木学科の友人達に見守られながら、小乗仏教特有の戒律に対する持戒の宣言を繰返しつつ、私はタイ僧キティパロットピクとしての得度式を受けた。

タイでは、成年に達した男子は一生の間に最低3か月は僧門にあることを社会的な慣習としている。そして、さまざまな階層の人達にとって、ある寺のある房舎における僧侶生活の共同者は、還俗したのちも最も信頼すべき友人として、その関係が継続するという。

7月から10月にかけてのワットマハーターにおける3か月間は、日本人として海外における適応性といったものをじっくりと考えることのできた期間であった。われわれの旅行中、タイであれカンボジアであれ、どのような辺鄙な田舎に行っても、漢字を書く人種としての、すなわち自己の文化を継続させながら、その国の人々との間に調和を保って生活している中国人のありようは、

われわれ日本人の海外におけるその対極であった。
ある援助すべき国の人々に対する「土木屋」としてのわれわれの接触の仕方は、直接的なものである。それだけに、性急な「技術のご指導」や「援助の押し付け」といったものではない、適正な接触の仕方を考えるということも、われわれグループの間の大きな問題であった。

帰国したのち昭和 40 年に大学を卒業、私は海外工事に意欲を燃やしていた間組に入社した。そして 4 年間、岐阜山中でダム工事の経験をしてから昭和 44 年の冬から 46 年の夏にかけてラオスのナムグムプロジェクトの開発に工事係として参加する機会を得た。最初は単身で赴任し、あとで女房と 2 人の子供達を日本から呼び寄せた。

メコン河の一支流ナムグムに重力式コンクリートダムをつくるという建設記録の公的なものは、鈴木博明氏(間組海外工務局)がすでに戦乱の中のダム工事というタイトルで学会誌(57 巻 10 月号)に発表しているから省略するとして、個人的な土木屋としての感慨を述べておきたいと思う。かつて学生時代に何人かの友人達と、

いわば土木屋の卵として徘徊し、自分なりのかかわりあいを持った東南アジアのメコン河流域で、今度は一人前の土木屋として、別の形で現地の人々との間に共有できる体験を実現することができたということは実に愉快なことであった。私自身が、あるいは同僚達が、あるいは職人達が、多くのラオス人、タイ人、ベトナム人達と、目的物築造のために示した共同歩調は実にみごとであったと胸を張っていえる。日本人的偏狭さが、土木屋さんの世界では無縁のように思えたものである。

しかし、いざれ昨今のタイにおける日貨排斥運動の延長のような形で、日本人に対する反感が海外における土木屋さん達の活躍をむずかしくする時代が確実にやってくるだろう。日本人が嫌われるのは、東南アジアにおける日本および日本人の比重に比例しようが、そういった傾向を少しでも小さくするには、東南アジアが好きでしようがない若い土木屋さん達が、彼地でお嫁さんをあっさりともらえるような気持ちのうえの身軽さで、どんどん出て行くことであろうと考えている。

(筆者は昭和 46 年 6 月ラオスから帰国したのち間組を退社、現在建設企画コンサルタントに勤務している。)

日本道路公団編・土木学会発行

B 5・1024 ページ・カラー口絵など 48 ページ

東名高速道路建設誌

定価 11 500 円

会員特価 10 500 円(〒 600 円)

水理学 I

●基礎土木工学全書 6 【第 1 回配本】

椿 東一郎 著
九州大学教授・工学博士

A 5・218 ページ・¥ 1300

本第 I 巻は、新進技術者・学生を対象に従来の水理学の主要課題の特性を整理し、その物理的意味の明解な説明を展開した。章末ごとに収めた問題は、読者の理解をより一層深めるものと信ずる。

●主要目次

1. 流体の基本的性質と次元解析 2. 流れの表示と完全流体の力学 3. 粘性と乱れの活用 4. 管水路の定流 5. 開水路の定流 6. せき・越流頂および水門の水理

コンクリート工学

●森北土木工学全書
伊東茂富 著 A 5・¥ 2600

都市計画

●森北土木工学全書 18
今野 博 編 A 5・¥ 2200

現場のための海岸工学

豊島 修 著 菊・(便) ¥ 2800 (高) ¥ 1800

アースダムとアースロックダム

河上房義 監訳 B 5・¥ 4800

コンピュータによる土木工学演習 近刊

新しい土質力学 I 近刊

土木振動学 近刊

測量工学 近刊

 森北出版

東京・神田小川町 3 の 10
電話 03-292-2601
振替 東京 34757

目録呈(Q 1-3 係)